

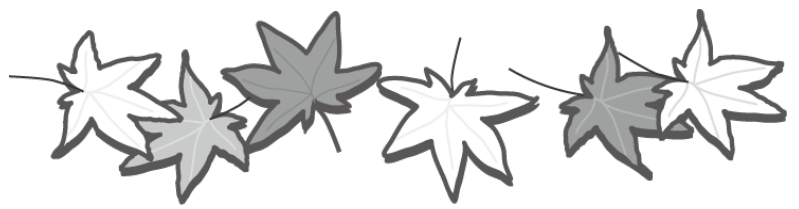


# 東北ヘルプ ニュースレター

2018 年クリスマス号

- 巻頭言 1 頁
- インタビュー：放射能計測所の、これまでとこれから 2 頁
- 追悼文 金子千嘉世先生の「祈ってるよ」と「よろしくお願いします」 3-4 頁
- O市営住宅でのインド舞踊「ギータンジャリ」 5-6 頁
- 「美談」の裏に潜む、「現実」 被災者と支援者、ボランティアとは 7-8 頁
- 「扶助基金」第二段階へ 9-10 頁
- 広島県呉市 西日本豪雨災害レポート 11-12 頁
- キリシタンの足跡を見詰め、400 年後を見据えて  
「東北キリシタン・ツアー」のプロジェクト進捗報告 13-14 頁
- インタビュー：気仙沼の障がい児支援の展開 15 頁
- 巻末言 16 頁
- 献金感謝・会計報告 17-18 頁





## 巻 頭 言

東北ヘルプ事務局長 川上直哉

2018 年もまた、東北ヘルプにとっては大きな変化の年となりました。

まず、事務局長である私の身に大きな変化がありました。震災前からずっと、大学の非常勤講師職をもって糊口を凌いできたのですが、2017 年秋、「次年度の授業はゼロとなる」旨を、複数の大学から一斉に伝えられたのでした。もはや東北ヘルプを続けることは不可能となる、と思われました。その時、日本基督教団石巻栄光教会から主任担任教師として招聘したい旨のお話を頂きました。家族の理解と協力を得て、そのお話は現実のものとなりました。こうして 2018 年度も、東北ヘルプ事務局は継続できることになりました。

年度が始まってすぐ、悲しい知らせが届きました。「扶助基金」を立ち上げ展開してきた佐藤由和さんが急逝されたのでした。その悲しみの中から、今回、中澤牧師が「『扶助基金』第二段階へ」を寄稿くださいました。

このニュースレターの作成を始めた頃、もう一つの悲しい知らせが届きました。東北ヘルプ理事である金子千嘉世さんが逝去されたのでした。今回、涙と共に、井形英絵さんが「追悼文 金子千嘉世先生の『祈ってるよ』と『よろしく願います』」を記して下さいました。

そうした中で「復興公営住宅への支援」「クリシタン・ツアー」「放射能計測所」「障がい者支援」「出会う会」等の継続事業は展開していきました。今回、それらの報告をお届けすることができます。それは、ひとえに皆様のご支援の賜物です。大きな喜びです。

また本当に有難いことに、名古屋キリスト教協議会様や日本 YMCA 様あるいは広島真宗学寮様など、実に多くの団体・教会等から、講演などの依頼をお受けした 2018 年でした。新約聖書にある通り、私たちは被災地で「多く与えられた」のですから「多くを求められる」のだと思います。被災地での経験と教訓を他の地域へとお伝えすること。それは私たちの責任だと思うのです。その意味で、今回「広島県呉市 西日本豪雨災害レポート」を掲載できましたことは、本当に感謝なことでした。

そうした中で、皆様にお詫びをしなければならないことがございました。私が教会の牧師職に慣れるのに手間取り、領収証とお礼状の発行が滞りました。特に 6 月末以降のご献金について、手つかずのまま今日に至りましたご無礼をお詫びいたします。それでも、今回のニュースレターに間に合わせる形で領収証の発行ができました。その背後には、有償・無償でお手伝い下さった方々の貴いお心があります。ただただ、感謝を覚えるばかりです。

不十分な事務局にも関わらず、本当に皆様に助けていただきましたことに、改めて御礼を申し上げます。おかげさまで、支援事業を継続して展開し、税金等の法人としての義務を無事に履行でき、また、いくつもの団体を（不十分ながらも）支援し続けることもできました。今回のクリスマスに、また皆様のお力をお預かりし、更に支援を展開できればと願って、ここにニュースレター「2018 年クリスマス号」をお送りいたします。ご高覧賜り、東北の被災地で展開している確かな働きを、さらにいよいよお覚え頂ければ幸いです。（了）

## インタビュー：放射能計測所の、これまでとこれから

東北ヘルプは、現在、職員 1 名の体制をとっています。その 1 名とは、仙台食品放射能計測所「いのり」で働く笠松絹子さんです。計測所は来年も現在と同様の規模で活動をする予定です。笠松さんに、インタビューをいたしました。ご高覧を賜り、計測所の働きを覚えていただければ誠に幸いに存じます。(2018 年 11 月 22 日川上直哉 記)

### ——これまでの計測所での働きについて、概略を聞かせてください。



2012 年 1 月から職員として働いています。前職は福祉職でした。

2011 年 12 月に計測所は日本基督教団東北教区センター・エマオの一階に設立されました。

その後、2013 年の 6 月に日本基督教団仙台北教会内へ移動しました。教会の皆様の温かいご配慮に、深く支えられました。そして、お母さんたち、そして農業従事者の方々などが、場所が変わっても、引き続き計測所を利用してくださいました。一昨年(2016 年)の 9 月、エマオ別館の二階に移りました。今でも毎月 10 件程度の依頼を受けて計測を続け、不安と向き合う方々に伴走しています。

この間、職員の体制は、縮小してきていました。最初は 3 人で仙台計測所を担当していましたが、今は、ひとりです。週に 1 日、計測所の働きをしています。残りの 4 日程度は、「いずみ(日本基督教団東北教区放射能問題支援対策室)」に出向しています。

### ——計測所の働きの中で感じたことは、どんなことでしょうか。

計測所が始まってすぐの 2012 年当初は、様々な方々から毎月 100 件くらいの計測を依頼されました。震災直後(2011 年)は放射能について知らず、子どもを外で遊ばせてしまっていて、知らないうちに被ばくさせてしまったのではないかと・・・という悩み・不安を持っている人が多かったようです。また、家族の間、友達の間で、理解の差や温度差があって、コミュニケーションが崩れ、信頼関係が崩れて苦しんでいる人たちの話を聞いてきました。子どものいのちと未来を守りたいと、皆さん、必死の様子でした。また、農業をされている方々も、落胆と怒りを抱えて計測所を訪れてくださいました。

### ——最近の様子はどうでしょうか

今年(2018 年)から、石巻のお母さんたちが、計測所と「いずみ」を活用くださるようになりました。お母さんたちは「子どもの健康を考える会・いしのまき」を結成され、「空間線量計測会」「土壌計測」「食品計測」「甲状腺エコー検査」「健康相談会」を、今年度、行ってくださったのです。今まで、津波のことで精いっぱいであった石巻です。放射能のことで意識が回らなかった、というお母さんたちが、それでも気になってきたことを表に出せるようになったのだと思いました。空間線量計測ではとても「きれい」な石巻でしたが、土壌では、通常の 4 倍程度の数値も確認されました。「ホットスポット」は、石巻にもあったのです。それを可視化できたことを、皆さま、とても喜んでくださいました。



空間線量計測を石巻市内各所で行いました。

### ——来年度に向けて、どんな思いをお持ちですか？

来年度も、引き続き同様の働きを続けられればと願っています。当初から、海外の方も何人もお越し頂き、今に至るまで日本全国の方々からお祈りに覚えていただきました。教会学校の子どもたちからの励ましのお便りをいただいたことは、印象深い思い出でした。そうした人々の心に支えられ、「まだ終わっていない」原発事故の現場に向き合って、活動が続けたいと思います。

(了)

東北ヘルプは、その立ち上げの最初から、祈りにこそ支えられてきました。

東北ヘルプの理事でもあった金子千嘉世牧師（郡山コスモス通りキリスト教会＝福島県郡山市）が、天に召されました。ひとりの「祈りの人」を、神様が津波にもまれ原子力に深く傷む東北の地に送ってくださったのだ——そのことに気づかされ、私たちは悲しみのなかで尚、感謝を新たにしています。

東北ヘルプ立ち上げの時の理事である井形英絵さん（前 南光台キリスト教会牧師・現 日本バプテスト連盟宣教部主事）に、金子先生の追悼文を記して頂きました。淋しさと、そして感謝を込めて、以下にご紹介いたします。

（2018 年 11 月 23 日 川上直哉 記）

## 追 悼 文

### 金子千嘉世先生の「祈ってるよ」と「よろしくお願いします」

元東北ヘルプ理事 井形英絵

2015 年度から東北ヘルプの理事を務めて下さった敬愛する金子千嘉世先生が 10 月 20 日 18 時 45 分に召されました。23 日に療養先の宮崎にて告別式が、そして 11 月 10 日郡山で「金子千嘉世牧師を送る礼拝」が行われました。

10 日の礼拝で、お連れ合いの金子貢司先生が、意識がなくなる 4 時間前に千嘉世先生が残した最後の言葉を紹介してくださいました。それは次の言葉でした。



「もっと優しい人になりたかった…」

先生の歩みと人々への関わりを思い起こし、最後の言葉に表された先生の思いに胸がいっぱいになりました。

\* \* \*

先輩の牧師が書いていましたが、千嘉世先生は、先生と出会う人に“自分は千嘉世先生に特別に愛されている”と思わせてくださる方でした。私もそう思っている一人です。先生は縦横無尽に動き、駆け付け、傍らに行って寄り添う行動の人でした。そして何より祈りの人でした。会話の最後は必ず「祈ってるよ…」そしてこの千嘉世先生の「祈ってるよ」は真実で強力でした。

千嘉世先生には今から 10 年ほど前、福岡の研修会で初めてお会いしました。牧師になって 10 年ほど経ったころのこと。女性の牧師に対して教会からの招聘がほと



んどなかった時代に牧師となり立ってこられた先生は、私にとってお名前をお聞きするだけの先輩でした。ご挨拶をした後の第一声、「神学校のころからずっと祈っていたよ。東北の天気を見ては寒くないかなとか、ごはん食べているかな、とか…」。

言葉を失うくらい驚きました。会ったこともない者のために 10 年以上日常的に祈っていてくださったのです。もちろんたくさんのお支えのなかで牧師として過ごしてこられたのですが、千嘉世先生にお会いして、ああこの方の祈りがあって私は立たせてもらうことができたのだ、と合点するほどの経験でした。

その後、先生とは様々な場面でご一緒することになりました。そして 3・11 後は被災地で共に働かせていただきました。私が 2 年前にガンを発症した後は、先輩「がん友」として話を聞き、助言して下さいました。そこにもずっと「祈ってるよ」が響いていました。

思うに先生は、目を閉じて祈る時だけでなく、目を開けて活動している時にも、出会った一人一人を想いながら、祈りながら生きておられたのではないかと思います。できる限りの精一杯で仕えながら、一方で不安や危険の中で明日を予測できない方々の状況に無力を突き付けられ、だからこそ信頼する神に祈り、神が希望をひらいてくださっていることを信じて祈り、私たちと共に生きて下さったのではないかと思います。

\* \* \*

千嘉世先生の祈りの言葉で特徴的だったのが「主よ、よろしくお祈いします」です。先生に出会うまで、通常は挨拶や頼み事で用いる「よろしくお祈いします」を祈りで用いるのをどなたからも聞いたことがありませんでした。千嘉世先生の「よろしくお祈いします」は本当に心に沁みました。神さま、あなたにお任せするしか術がありません、あなたは全てをご存じです、あなたが最善を行ってくださると信じます、あなたが共にいて下さって感謝します、あなたにお任せします…それらが「よろしくお祈いします」にぎゅっと詰まっていた。

病いと痛みの中にありながら、最後まで療養地の宮崎からスカイプを通して郡山の信徒と聖書の言葉を分かち合い祈りを合わせた千嘉世先生、最後まで東北を思い戻ってくることを意志し、諦めなかった千嘉世先生。私たちは一人ひとり「よろしくお祈いします」と祈られました。その一つひとつの祈り、一回一回の祈りに、神は耳を傾け受け止めて下さったと信じます。

地上でお会いできないのは本当に寂しいですが、神が千嘉世先生と共にいて下さるので安心です。先生と、遠くにあっても近くにあっても、共に過ごすことができた日々を心から感謝します。(了)



日本バプテスト連盟郡山コスモス通りキリスト教会を背景に

2011 年 3 月 11 日の東日本大震災から、7 年半以上の時間が過ぎました。政府関係の様子を見ていると、たとえば復興予算なども「10 年」を一区切りとしてひと段落を付けて行く方向にあるようです。「2020 年の東京オリンピック」という催事もまた、そうした世間の雰囲気を作り出していくことに一役買っているように思われます。

**振**り返ってみますと、2011 年秋まで、被災地全域に「避難所」がありました。多くの不安と混乱の中で、仮設住宅への移動が行われました。そして今、仮設住宅の多くが「空き家」となり、「復興公営住宅」「災害公営住宅」あるいは「市営住宅」と呼ばれる建物が整備され、被災地は確かに「被災後の日常」を進めているように思われます。

**今**、避難所とも違う、そして仮設住宅とも違う支援が必要とされています。それを手探りで探し出し、実践している中澤竜生牧師に、この夏の支援の一コマを記していただきました。皆様のご支援によって、こうした働きが進められています。感謝を込めて、報告いたします。

(2018 年 11 月 22 日 川上直哉 記)

## 〇市営住宅でのインド舞踊「ギータンジャリ」

東北ヘルプ理事 中澤竜生  
(基督聖協団仙台宣教センター)



住民の皆様もインドの衣装を着けて一緒に記念撮影

### 〇市営住宅のコミュニティビルディング

2015 年に完成しました〇市営住宅は所謂「災害公営住宅」です。仙台市・松島市・石巻市・登米市・気仙沼市で被災された方を対象とした 112 戸の集合住宅です。

東北ヘルプは、入居が始まる直後から社会福祉協議会等と連携し、〇市営住宅のコミュニティ構築を継続してきました。2016 年には自治会が設立し、初めに入居されている方の把握から、その活動が始まりました。暮らし

を豊かにするために住民からの声を聞き、社会福祉協議会と相談する。行政では難しいことがあれば、ボランティアに相談し工夫する。そんな苦勞を引き受ける、貴いお働きが始まったのでした。私たち東北ヘルプは常にこの自治会寄り添いたいと思い、足並みを揃えて一緒に前進させて頂きました。

自治会の皆様は、イベントを催行して住民の皆様の出会いの場面を作りたいとお考えになりました。私たちも、そのお手伝いをさせていただきました。仮設住宅から異動したばかりの頃は、どうしても、同じ方ばかりが参加されていました。それでも地域の方が呼び掛けを繰り返すことによって、次第に交流が広がり、深まってきました。

特に「祭り」のイベントは、1 年目、2 年目と、外部支援団体が主な作業を担ったのですが、今年 3 回目となる祭りは、ほとんどの住

民が参加して力を合わせて行ってくださり、本当に活気溢れるイベントとなったのです。

私たちは、ここまでのどりついた秘訣を知っています。それは、自治会最初のメンバーによる、住民への「仕える」姿勢にあったのです。この最初のメンバーは、今では「元気会」と名付けられています。いつも明るく、元気で、優しく、一致しています。そして何よりも住民に慕われています。ここに関わる方々は、どんなことでも耳を傾け、良いことを提供します。私たちはこの方と共に地域を盛り上げる働きに参加出来ることに、喜びと愛しさを感じています。

### インド舞踊「ギータンジャリ」

今年春、東北ヘルプの川上事務局長を介して、インド舞踊「ギータンジャリ」の皆様のご紹介がありました。「被災者の皆さんと震災の鎮魂の舞踊をしたい」というお申し出でした。はじめは「インド舞踊？」と、戸惑いました。

ですが、「ギータンジャリ」の主宰者である櫻井暁子さんとお目にかかり、その人柄に触れるうちに、安心感が湧き上がりました。何よりも〇市営住宅の住民の皆様とお引き合わせをしたとき、すぐ和気藹々となった光景を目の当たりにして「大丈夫だ」と確信しました。櫻井氏は、住民の方数名にインド舞踊の衣装を用意してくださるとおっしゃいます。皆様の目は輝き始めました。

櫻井暁子氏は、1965年、日本人として初めて舞踊科目でインド国費留学をされ、以来インド舞踊の普及、次世代の育成を使命として今日に至る、という方で、その活動は歴代インド総領事から「日本のインド文化大使」と称賛されていた方でした。被災地には今でも本当に貴いつながりをお寄せいただいています。ただただ、感謝を覚えるばかりです。

### 〇市営住宅集会所にてインド舞踊当日

8月19日（日）午後、〇市営住宅集会所で、インド舞踊の公演が始まりました。幸い、集会場は住民の皆さんでいっぱいになりました。足を床に強く踏み叩く音が、集会所にいる全員の身体全身に伝わります。見に来られた皆様は、その迫力に呑み込まれていきました。演劇の途中、全身黒の衣装を着た櫻井氏が、日本人形を抱きかかえ、登場し、全身を使い渾身込めた踊りを展開します。津波や、原発により翻弄された人の状況を表現しておられたのです。それを見た住民全員が、涙を流しておられました。

後で、皆さんに、その涙の意味を聞きました。この涙は恐怖と恐れ、悲しみと失意の涙だけでなく、その舞踊を必死で見守るなか、前に進もうとする決意が湧いてきた、その涙でもあった、と、聞かせていただくことができました。

### 「私たちに出来ることを」

「災害地」と言われ、離れていった「あの場所」は、多くの人々にとって住み慣れた場所でもありました。その場所から離れ、今〇市営住宅に移り住んだ方々の心には、深い負い目が残されました。それが涙になって流れ出ていました。「でも今、新しい交流が深まる中、この新しい場所から何かができるのではないかと考えています。自分も被災地で何らかのお手伝いをしたいのです」と、ある方が私に語ってくださっていました。櫻井さんのインド舞踊公演は、まさに今必要な、生きている魂の「鎮魂」となったことでした。



住民の皆さんと一緒に稽古をする櫻井さん(写真中央)



2011 年の東日本大震災とその中に起こった原発事故災害は、いったい、何だったのか。そこに見えてきた課題は何か。そこに、過去の災害からの教訓は、どう活かされたのか。その中で見えてくる「支援」とは、いったい何であるのか。・・・そうしたことを「現場」から話し合うワークショップが、2016 年 5 月から、仙台日本基督教団仙台ホサナ教会を会場として、継続して行われています。東北ヘルプは、その幹事役を担ってきました。

そのワークショップは「出会う会」と名付けられました。現場の生々しい報告を語り合う中で、支援者同士が出会い、互いに助け合う、そんなネットワークが生まれ育まれることを願っての命名でした。

会合は、毎回夜 6 時から行われます。東京大学被災地支援ネットワークの方々もお越しになりますから、夜 9 時には終了しなければならない、のですが、いつも、討議に熱が入ります。そこでは、「マスコミでは決して伝えられないこと」が語られます。支援者がはまり込む矛盾が赤裸々に明かされます。そして、日本の、あるいは市場主義・グローバル経済・資本主義社会の、深い構造的課題が、現場から照射されます。毎回、討議の速記録が作成され、配布されます。それは貴重な資料となるものと思います。

ホームページ等の情報発信で東北ヘルプもずっとお世話になってきた鈴木範子さんに、先月開催された「出会う会」に出席していただき、そこで感じたことをお書きいただくことができました。最初から被災地の現場に立ち、その深いところで直に触れてきた矛盾の肌触りが、記されています。是非、ご高覧頂ければ幸いです。

(2018 年 11 月 22 日 川上直哉 記)

## 「美談」の裏に潜む、「現実」

被災者と支援者、ボランティアとは

デザイン&編集プロダクション アイ・プロジェクト

ディレクター 鈴木範子

**長**年、取材と編集を生業としてきました。東日本大震災をきっかけに、多くの混沌とした思いを抱えながら、8 年が過ぎようとしています。

「被災者と、被災者ではない？被災者」「被災者と、被災した支援者」「ボランティアと、寄り添うボランティア」を、なんと表現してよいのか。時の経過とともに、微細に変化する被災者と支援者の思いと行動。発

災直後の「記録しなければ」から、「記録すべきか、否か」への自問自答。ペンを携え各地を歩き、抱えてしまった、さまざまな葛藤です。

2018 年 10 月 16 日、第 27 回目の「出会う会」へ同席させていただける機会を得て、支援・ボランティアの在り方を改めて考えることになり、その思いはさらに深くなったかと思います。



ちょうど、そこから半月ほど後に、岩手内陸部にある企業の広報担当者と話す機会を得ました。被災に関わる取材への協力を願う内容です。彼は「ご協力したいのはやまやまですが、本当の被災地の方々に、何と云われてしまうか。それが不安で…」とおっしゃいました。またある方は、「以前に取材を受け、首都圏の支援コーディネーターからお叱りを受けて」と。被災地は、率直な言葉を発する事さえできないのか？と、憤りさえ覚えたやりとりでした。

実はこれに類似した状況は震災直後に、原発被災地、津波被災地、内陸被災地域のどこでも耳にしたことでした。1メートルの違いが、「被災者ではない被災者」をつくってしまった。人の感情の複雑さを痛感させられました。これまでの平常時では考えも及ばない大災害で生まれた、ねじれの現実です。

\* \* \*

とても多くの方々とお目にかかる仕事ですので、全ての出会いを継続し親密な形で残すことは、どうにも不可能なことです。残念なことです。仕事を通じた出会いは「一期一会」と考え作業してきました。しかし、東日本大震災では、そのスタンスでよいのか？という思いがありました。支援とは、ボランティアとは、継続して意義があるものと。

「出会う会」で出逢った皆さんは、発災後からこの時まで、時間・労働・知恵などと、さまざまな形態で、多くを被災地・被災者へ捧げてこられたことを痛感いたします。

\* \* \*

**掲**題したのは『美談』の裏に潜む、『現実』です。多くの現実を目の当たりにし思うのは、自分も泥をかぶる覚悟をもって、被災地と膝を突き合わせ本音をうかがい、そこで初めて本論を捉えることができるのだ、ということです。そして、時の経過による変化の書き留めが必須であると思われます。一方、マスコミにおける報道は、時に、本音をそのまま描くことが「Yes なのか」と問われます。ネガティブな表現することでトラブルに火を点け、明るい未来を牽引できるのかと問われます。率直に真実を伝えようと、自らの立場を危うくしてきた方々もいます。

かくいう私も、見聞きしたことを控えた現実はたく

さんあります。がれきが山積みされ、異臭がまちを覆い、歩行者などなく、自衛隊の車だけが通り過ぎる被災地で、自転車を引く一人の年配者。その籠にはたくさんの泥にまみれたゴルフクラブが。がれきに埋もれ人通りのない被災地で、鍵が開け放された家の前では、聞き慣れない方言が横行することも。これ以上に、言葉にできない現実が、被災地には当たり前にあったのです。

\* \* \*

今回参加した「出会う会」のなかで提議された、さまざまな支援の在り方には、腑に落ちるお話が随所にありました。「支援される側の在り方」や、「復興の経過に寄り添った支援の在り方」。「経済的自立の在り方」や「自立への道筋を支える支援者の在り方」。そして、「報道の在り方」です。加えて思い起こすのは、行政が唱える“自走”という言葉。「ここまで支援したから、後は自走してください」と。沿岸部も内陸部も、形が変わっても大きな爪痕を引きずり心的疲労を抱えている現状に、“自走まで”と“自走后”の支えの在り方の難しさを、改めて感じ入っています。

\* \* \*

被災から 10 年が、確実に近づいてきています。震災バブルが過ぎ去り、地球的環境が大きく変化し始めているなか、今、何をすべきなのか。大災害が頻発するなか、未来の子ども達に、東北の素晴らしい生活環境を残せるのか。「出会う会」の堅実なお取り組みに、さらなる継続を願わずにはられません。 (了)



2018 年 10 月 16 日 第 27 回「出会う会」の様子  
この日は特に、「綿花栽培」による復興への取り組みが報告され、討議されました。

津波被災地では、復旧から復興への長い道のりが始まっています。その中で、「シングルマザー」「障害者」等、所謂「社会的弱者」の苦しみは、いよいよ見えなくなり、そして深まっているように思います。

共同体に包摂されながら、尊厳を回復しつつ、一人ひとりの生活が再建される。そんな支援の仕組みが作れないか。そう考えて、扶助基金が始まり、約二年が過ぎました。2018 年は、その第一段階が終わる時期となったようです。

扶助基金は実行委員会によって運営されています。その委員長の中澤竜生牧師（東北ヘルプ理事）に、ここまでの経緯と最新の情報をまとめて頂きました。ご高覧賜り、引き続きご支援を賜れば幸いに存じます。

（2018 年 11 月 21 日 川上直哉 記）

## 「扶助基金」第二段階へ

扶助基金実行委員会 委員長 中澤竜生

皆様には、お祈りと経済のご支援を続けて下さり心からの感謝を申し上げます。

この春、扶助基金の発案者であり開拓者であった佐藤由和さんが、逝去されました。これをもって、扶助基金はその第一段階を終了し、第二段階へと進むことになりました。以下、これまでの歩みを整理し、これからの展望を記します。

### 1. 「扶助基金」の始まり

扶助基金は 3 年前、東北ヘルプの川上直哉事務局長と、南三陸町の津波被災者・佐藤由和氏の会議から始まりました。

南三陸町の仮設住宅に入居されていた佐藤由和氏はリーダーであり、様々な困りごとの相談を請け負っていました。その姿勢は、断ることなく、相談者の思いを受け止めることに徹しておられました。ですから、相談を受けた内容が時に重く、どうしたら良いかと、しばしば悩んだようです。「弾力的に自立への励みとなるような“基金”があれば…」と、佐藤さんは思い至り、私に相談され、私は川上先生に相談しました。それが、扶助基金の始まりでした。川上先生は、神戸に同様の基金があったことを思い出し、それを東北の現地に沿った仕方で展開できないか、考えて仕組みを設計してくださいました。



「扶助基金」の構想を話し合う佐藤由和さん（写真左）

その仕組みはこうです。

- ①全国に「被災地の生活困窮者を支援する基金」を募る。
- ②地域の世話係を担ってくださる方（リーダー）を探す。
- ③その方に基金を「10 万円」ずつお預けし、ひと世帯に最大 2 万円ずつ、5 世帯を支援できる体制を作る。
- ④実行委員会を組織し、その方が基金を活用して支援をする毎に、その内容を委員全員で共有する。
- ⑤いつか支援を受けた方が基金に募金できることを目標に、生活の回復を目指して伴走する。

そして、「扶助基金」の全国募金が開始されました。感謝なことに全国から 102 件・総額 1,212,612 円（2018 年 10 月末日現在）の献金が、基金のために捧げられ、累計 25 世帯・48 万 5 千円の支援がおこなわれました。

扶助基金は、生活困窮者の生活再建だけを目指すものではありません。「被災者の尊厳を回復」をこそ、目標としています。被災した際、支援を受けることは絶対に必要なことです。しかし、そのままでは、被災者はつらい。どんな形でも、お互いに支え合う関係が立ち上がることが、支援のどこかの段階で、絶対に必要だと、現場で、私たちは気づきました。支えられた人が、誰かを支えていく。そのための仕組みが、「扶助基金」です。生活困窮に陥った方が、困難を乗り越え、そして誰かを支える側に回る。そのために、扶助基金の管理をする地域の「リーダー」の方が、支援を受ける方と良い関係をもってかかわり続けることがとても大事となります。

## 2. 最初の「リーダー」佐藤さんの逝去

最初の扶助基金は、発案者である南三陸町の佐藤由和さんをリーダーとして始めました。具体的には、復興公営住宅に入居後すぐ住宅の共営費が支払えなくなった三つの世帯への援助で始めました。試行錯誤をしながら支援と相談・助言・生活改善指導を続けた佐藤さんは、張り切っておられました。そんな佐藤さんに、突如、病が襲います。がんでした。

入院中は、奥様が困りごとを聞いて、佐藤さんに伝えておられました。手術後、回復しますと、またすぐに精力的に困りごとの相談を受けはじめました。たとえば家賃が払えない状況に陥った方と話し合い、扶助基金を利用しつつ、生活回復への指導もしてきました。私たち扶助基金実行委員会は、その様子をうかがいながら、ソーシャルワーカーの介入のタイミングを見計らっていました。

今年2月、1本の電話が私に入ります。「先生。申し訳ないです。急遽入院することになりました。落ち着いたら電話をします。」というものでした。そして今度は、あっという間の幕切れになりました。一ヶ月後、彼は天へと召されてしまったのです。私と川上事務長が、葬儀に出席しました。

扶助基金の特質は、地域の評判の良い人をリーダーとしてはじめて成り立ちます。つまり、権威主義的にならず、他人に困りごとの話を流さず、そして何度も話し合う、そんなリーダーが、扶助基金には必要です。そして、佐藤由和さんは、そのモデルとなった方でした。彼はいつも弱い人の味方でした。その彼が天に召されたのです。悲しさは一層でした。

## 3. 扶助基金、第二段階へ

多くの方が復興住宅地に入居されて1年、あるいは2年の時を過ごしました。そこには様々な困りごとがあり、その背後には複雑な事情があります。またもちろんその一方で、喜びの声も多々あります。今、扶助基金は、悲しみのなかから第二段階へと進む時を迎えたようです。私たちは、被災された方々と、悲しみだけではなく喜びも共にし、尊厳の快復を目指した支援を、促進させたいと思っています。

昨年、私たちは、佐藤由和さんの活動を確認しなが

ら、次のリーダーを探していました。南三陸志津川と石巻市に、評判の良い、地域の相談役の方がそれぞれおられました。昨年、私たちはその方々に扶助基金のリーダー役をお願いしました。みなさま、それを真剣に考え、引き受けてくださいました。その方々との活動報告を、以下に記させていただきます。

(1)南三陸町志津川で、震災後の翌年、育ち盛りの男の子2人と奥様、母親を残して、一人の男性が逝去しました。その後、遺族の生活は一変します。奥様の今までの仕事では家庭を養うことが出来ませんでした。被災した地域で仕事を探すのは大変で、女性が夫の分まで稼ぐとなれば、家庭を顧みることができなくなっていました。これまで、私たちは、この世帯にお米の支援等をしながら、地域のリーダーである S さんと一緒に、丁寧に話し合ってきました。今、ソーシャルワーカーの介入を検討しながら、扶助基金での支援のタイミングを模索しています。

(2)石巻市にお住まいの方で、身寄りがなく、被災され、さらにその後に交通事故に遭われて身体に不自由を負われた方が、今年春、急逝されました。その方の友人の Y さんが、死亡確認の手配からその葬儀関係一切に至るまですべてを引き受けられました。Y さんにも経済的な余裕が十分にあるわけでもなく、扶助基金がそこに用いられました。死去にあたってその尊厳が守られたことは、感謝なことでした。

(3)南三陸町で、ご年配夫婦と1人娘とその子どもの三世帯が共に生活しています。今、その家族の収入源は「子ども手当」だけです。生活保護も申請しているのですが、遠方の病院に通院するために自動車が必要であり、自動車を持っていると生活保護が受けられない、のだそうです。困り果てている状況でした。幸い南三陸町志津川のリーダー S さんが丁寧に関わりを持ち始めてくださり、ソーシャルワーカーを介して解決を目指して行くことになりました。その必要経費として扶助基金を活用できればと願っています。

佐藤由和氏が、地域のために、弱者のためにその人生の最後の時を注ぎ込んで応援したように、私たちもそのようにありたいと願っています。(7)



**2012年**、フィリピンを巨大台風が襲い、大きな被害が出ました。その時、特に仙台の皆さまから、「自分たちも助けてもらったのだから、何か助けをすることができないだろうか」と、相談を頂きました。東北ヘルプは与えられたネットワークを活用し、募金を集め、スタッフを派遣して、フィリピンの超教派支援ネットワークの立ち上げのお手伝いをいたしました。

**2014年**、広島で巨大な土砂災害が起こりました。その時、南三陸町の仮設住宅等にお住いの皆さまから、「今必要なものを持って行ってほしい」と物資を託されました。東北ヘルプは、キリスト教のネットワークを辿ってその物資を被災直後の広島の避難所などに届けることができました。

**2016年**、熊本で巨大な地震が起こりました。東北ヘルプは物資支援の車両をお預かりし、キリスト教会と仏教者とのネットワークを辿って、支援物資を届け、現地で支援の為の会議を行いました。

東日本大震災の現場は、多くの教訓と広範なネットワークを残しました。私たちはそれを大切に活用したいと願っています。

**2018年**、広島をまた、水害が襲いました。今回も、東北ヘルプ理事の中澤牧師が現地に向かわれました。その報告をお書きいただきましたので、以下にご紹介いたします。

## 広島県呉市 西日本豪雨災害レポート

2018年10月29日

東北ヘルプ理事 中澤竜生

( 基督聖協団 仙台宣教センター )



2014年8月に起きた「広島市豪雨土砂災害」の爪痕は深く残りました。今も砂防工事が続いていますが、多くの人に、その災害がもう「既に過去の事」と思われていた今年8月、同じ広島を再び「西日本豪雨災害」が襲いました。その災害現場へと、東北の被災地からも多くのボランティアが集結しました。私も、その一人として現地へ行きました。

現地に立って「この災害は東日本大震災とは異なるな」と感じました。災害から2ヶ月

しか経過していない現場に立ったのですが、周りは平素の様子を取り戻して見えました。私は呉市の災害現場を視察させていただきました。災害直後は通行止めとなった高速を通過して現地に入ることができました。土砂があったであろう場所の脇を、説明を受けながら移動しました。高速を降りて直ぐの広場で車を降りて、歩いて現地を案内いただきました。既に殆どの土砂は取り除かれていましたし、遠くに目をやると被害のない家も多く建ち並んでいました。まさに「局所的災害」でした。その場合、その「局所」に住んでいた方は、災害に遭わなかった近郊との日常の温度差に悩み、苦しむ事となる。それは、

「3. 11」の被災者の蒙った状況と同じだと思いました。

呉市の被災地を案内して下さったのは、超教派で組織された「キリスト教会・広島災害対策室」の室長 北野献慈先生（広島福音自由教会牧師）でした。先生は当時の事を振り返り詳細に語って下さいました。伺いながら、災害が起きた場所で感じるものがありました。臭気です。それは、津波災害の悲しい記憶を蘇らせました。ご案内に従って坂道を上り続けると、破壊尽くされた広場が見えてきました。その脇を歩きますと咳が止まりません。雨で流された花崗岩の風化残留土、土砂災害に弱い「まさ土」と言われる砂、引きちぎられた木、家にあったであろう生活物…そうしたものが集められたところに風が吹きますと、目を開けているのも辛い状況となります。2ヶ月が経った今でもそうなのですから、当時はどれ程ひどかった事でしょう。こうした災害を地元では「土砂津波」と言うのですよ、と言われ、納得したのでした。

安全の為に既に壊された数件の家、その跡地から微かに線香の匂いが漂いました。亡くなられた方がいらっしゃるのだらうと思いました。そう思った瞬間に悲しみが心を覆います。帰路、また違う道を通りますと、高さ1.5メートルほどの「まさ土」によって壁や戸窓を破壊され、一階部分が埋まってしまった家が、数軒ありました。このまさ土が固まると人の手では掘り起こせないくらい堅くなるそうです。そこで聞こえた被災者様の声は「土砂を取り除いてほしい」でした。

行政も全力を尽くしていますが、早々に気持ちを落ち着かせたい方の望みには対処しきれずにいます。そこでボランティアの役割が重要になります。例えば細かい部分の泥を掻く。その為には重機も必要となります。「広島災害対策室」は3ヶ月間かけて重機等をリースし、一軒ずつ丁寧に片付けていました。

ある一軒の方を訪ねました。外観からは分からなかったのですが、中はとても人が住める状況ではありません。その家を一人の年配

者様が片付けをしていました。「この家は取り壊す」とおっしゃいました。「子供たちも遠方にいるので…」とのことでした。この方は既に応急仮設住宅に住んでおられます。

ここから繊細な「寄り添い」が必要になると思います。たとえば土砂で汚れた思い出の写真を拭き取る優しい作業などが求められます。そうした支援には、静かにそばにいて生まれる「繋がり」が欠かせません。つまり

「思いやりのネットワーク」です。東日本大震災を体験した方から良く聞くことばが思い出されます。「災害は辛く悲しいものであったけれども、それ以上に人との出会いは私を救った」という言葉です。今、広島も、そこに向かっている。そのために労する広島のクリスチャンネットワークを心から応援したいと思いました。

今回、残念ながら応急仮設住宅への訪問は叶いませんでしたが、既に仮設住宅にはリーダー的な方もおられるようです。また、「見なし仮設」（民間のアパートなどを借り上げて活用する応急仮設住宅）に入居されている方もいるようです。そうした方を繰り返し訪問することが、重要です。私は広島の皆さんに、「3. 1 1」の教訓として、今被災者が将来を悲観しやすい状況である事をお伝えし、何度も通わなければいけないことの重要性をお伝えしました。そして、そのような働き手が今後必要だと強く感じました。できれば、次回は東北の被災者であった方を連れて仮設を訪問したいと願っています。





# キリシタンの足跡を見詰め、400 年後を見据えて

## 「東北キリシタン・ツアー」のプロジェクト進捗報告

仙台白百合女子大学カトリック研究所客員所員

川上直哉（東北ヘルプ事務局長）

2018 年 11 月 15～16 日、私は「全国かくれキリシタン研究会・臼杵大会」に参加していました。その報告を、「キリシタン・ツアー」の進捗状況と共に、以下、報告いたします。



### 1. 経緯と目的

2014 年 11 月、大阪府茨木市にて「全国かくれキリシタンの里サミット」が開催されました。それは、「キリシタンの里」をコンテンツとして観光業を新しく興していこう、という話し合いでした。そこに東北ヘルプから中澤竜生理事が出席しました。それが、「キリシタン・ツアー」のプロジェクトの、東北ヘルプとしての最初の具体的な一歩となりました。

「ツーリズム」で復興を目指そう——そのアイデアを得たのは、震災直後の 2011 年 4 月だったと記憶しています。大混乱の中で、私は塩釜市（仙台の隣です）のフランス料理店にいました。がれきをようやく片付けた店内で、大阪大学でツーリズムを学ぶご僧侶（すでに様々に支援の現場で大活躍されていました）と、商工会青年部の方と、これからの「復興」の可能性を話し合う会食でした。がれきの中から復興するためには、「復旧」を越えなければならない。新しい何かを起こさなければならない。その可能性は、ツーリズムにあるのではないか。まだまだ

あちこちに壊れたままの家屋が残る中での話し合いは、不思議な迫力をもって記憶に残りました。

被災地にはたくさんの方が訪れていましたが、その中のキリスト者の方、とりわけ海外からの方々から、「東北の殉教地を案内してほしい」との要請を、被災地側の牧師や宣教師の多くが受けていました。宮城県北で支援活動が続ける OM 宣教師のスミスドルフ夫妻も、そうした要請を受けていた一人でした。スミスドルフ先生は支援の中で、殉教地を擁する地域の有力者の信頼を得ていました。そこから人のつながりが生まれ広がって、市長さんや史跡保存会の方々と東北ヘルプとの連携を生み出していたことができた。

そして、2014 年となります。話し合いの中で、

- 「東北キリシタン・ツアー」によって、全国・全世界の皆様には被災地を覚えていただこう。
- 400 年前の殉教者と出会う中で、被災地に働くキリスト者とも出会っていただこう。

というコンセプトが固まり始めました。そして、

①仙台白百合女子大学カトリック研究所の皆様が協働して下さいました。

②宮城・岩手・福島の郷土史家の方々が力を寄せてくださり「東北キリシタン研究会」が立ち上がりました。

仙台白百合女子大学 カトリック研究所主催  
2018年度 第3回研究会

### 東北キリシタン研究 報告会 Part II

仙台白百合女子大学は東北唯一の四年制カトリック大学です。  
大学の地域貢献事業として、カトリック研究所は「東北キリシタン研究」を推進し、  
郷土史を学ぶことの意義を、二つの発表を通してご報告いたします。

日 時: 1月26日(土) 13:30~15:30  
会 場: 仙台白百合女子大学 (1号館2階123室)  
※参加費・申込不要

第1部: 川上直哉氏 (かわかみ なおや)  
仙台白百合女子大学カトリック研究所客員所員、  
日本基督教団石巻光教教会牧師、神学博士。

第2部: 高橋陽子氏 (たかはし ようこ)  
仙台白百合女子大学カトリック研究所客員所員、  
仙台白百合学園中学・高等学校元教諭、  
東北キリシタン研究会事務局。

【交通アクセス】（詳細は大学HPをご覧ください）  
○仙台市地下鉄  
【東北中央駅下車】バス停5-2より徒歩15分  
○宮城交通バス  
【宮城交通バス】仙台白百合女子大学入口下車 徒歩5分（東北中央駅からバス停まで約10分）  
※乗車券は必要となります。バスに乗りかえり、お乗りください。  
【お問い合わせ】  
仙台白百合女子大学カトリック研究所 〒981-3107 仙台市青葉区南町6番1号  
TEL 022-374-5090 E-mail library@seiryo.ac.jp  
大学HP <http://seiryo.ac.jp>



- ③被災地で活動を続けたクリスチャン・平田美保さんが故郷・五島列島と東北ヘルプをつないでくださいました。
- ④株式会社シオントラベル様が、旅行代理店としての被災支援をしようとして、協力して下さることになりました。
- ⑤更に幾つもの教会や団体・学校や個人の方々が、不慣れなツアーの企画に参加して、私たちと旅をして下さいました。準備は、一つずつ、組みあがっていきました。

## 2. 「巡礼」というインバウンドの可能性

気が付けば、日本中が「インバウンド」に沸いていました。毎年 10 パーセント以上の外国人観光客数の増加が報じられました。ただ、東北だけは、例外となりました。それは当然でした。「Fukushima」がそこにあるからです。

「原発事故が終息した」と、世界中の人々は、考えておられないようです。福島・宮城は、はっきりと忌避される。それは、海外と交渉する旅行業者の方々のはっきりした実感となっていました。

私たちは、二つのことを考えました。

一つは、情報の確保です。理事の木田恵嗣牧師のお力をお借りして精密な放射能計測を行ったことを、とても思い出深く記憶しています。

そしてもう一つは、「巡礼」の意味です。毎月何度も福島県に通い、そこに生きる人々の息遣いを感じながら、問題の本質は「人間の尊厳」が危機に瀕している点にある、と確信させられています。そして、振り返って「キリシタン」を見詰めてみると、そこには同じ問題の本質が見えてくる。史跡の「観光」ではなく、殉教地の「巡礼」を。そこには、インバウンドの可能性がある。そう思われてきました。

実際、アジアには、きわめて多くのカトリックの方がおられます。プロテスタントでも、例えば韓国の諸教会は殉教地への巡礼に強い関心を持っています。「ツーリズムによる復興」の可能性が、そこに仄見える気がしました。

## 3. 次の段階へ

仲間と研究を進めつつ、国内の諸教会・団体・学校・個人の方々を毎年 5 組ほど巡礼にお連れしガイドをして、3 年が経ちました頃、韓国から、そして東北の殉教地から、新しい動きが興り始めました。

韓国ソウル大司教区直属の巡礼専門事業者が、東

北への巡礼を検討したい旨、連絡をくださいました。2018 年 7 月、私たちは実務責任者の金ウオンチャン氏を巡礼地にお連れしました。その後ソウルから連絡があり、2019 年 6 月ころから、定期的に巡礼団を募集編成して送るよう準備を進めると、ご連絡を頂きました。

2018 年 7 月 15 日付「河北新報」等で報道して頂きました。

同時に、東北の殉教地からは、行政と連携して「ボランティアガイドネットワーク」の立ち上げようとする地域住民の皆様の動きが本格化し始めました。更にその動きに連携し、研究会の成果を整理して、ガイド養成の試みが始まっています。冒頭の「全国かくれキリシタン研究会・臼杵大会」は、その学びの一つとして参加したことでした。

## 4. 400 年後を見据えて

400 年前、豊後の国（現座の太宰府）は、九州探題・大友宗麟の庇護の下、日本キリシタンの本拠地となっていました。その消息は、例えば臼杵市などに、はっきり見られます。その遺跡・遺物・伝承を前に、考えました。400 年前の先達は、何を残したのか。その意味を見出せなければ、この私たちの被災地での奮闘も、400 年後に意味を見出されないことだろう。——そう考えながら、今回ここに「キリシタン・ツアー」のあゆみを振り返りました。

引き続き、国内からも、キリシタン・ツアーを募集しております。お一人からでも、ご相談に応じます。東北ヘルプ事務局宛、ご連絡頂ければ幸いです。ご一緒に、被災地で、つまり、人間の尊厳を脅かされる現場で、キリシタンの足跡を見詰め、400 年後を見据えて、21 世紀の歩みを、考えてみませんか？

東北ヘルプは気仙沼支援を展開しています。その担当は、秋山善久理事（日本同盟基督教団仙台のぞみ教会牧師）が担っておられます。

被災地は、もともと少子高齢過疎の現場でした。そこに災害が襲ったのです。とりわけ障がい者やその母親など「社会的弱者」の苦しみは重いものとなりました。

「もし“最も小さくされた人々”を中心に復興がなされれば、そこには少子高齢過疎を乗り越える新しい可能性が生まれるのではないか」——秋山先生は、そう語りながら、気仙沼の支援を担い続けてくださっています。

秋山先生にお話を伺いました。復興への一步一步を体現するお話です。どうぞ、ご高覧下さい。

（2018 年 11 月 24 日 川上直哉 記）

## 気仙沼「障がい児支援」の展開

——この支援を展開された経緯をお話してください。



私はもともと、気仙沼市で生まれました。牧師となって宮城県に任地を与えられ、故郷のために何かできる事はないかと、思っていました。そうしたなかで、気仙沼市本吉にお住いの佐藤工（さとう・たくみ）さんと、2012 年の暮れに出会いました。

——佐藤さんとは、中澤牧師（東北ヘルプ理事）の仲介で、2012 年夏には東北ヘルプ全体として協力することを決めていましたね。

はい。気仙沼市に本吉町が合併する時、合併推進の立場で中心的な働きを担った佐藤さんは、合併後、障がい児への福祉が手薄になったことを嘆いておられました。その問題は震災の中で露骨に現れ、そして佐藤さんは、中澤先生に相談を寄せられたのでした。

2012 年の 12 月、気仙沼市本吉地区の障がい者救援のための会議が開かれました。その中心は佐藤さんでした。私はその会議に東北ヘルプから派遣されて出席しました。会議には基督教の団体のみならず様々な団体が参加していました。

会議は継続され、問題は深く理解されました。障がいと共に生きる子どもたちは、震災後ずっと、確かに悲惨な状態に置かれていました。たとえば、あるプレハブの建物一棟に集められて、そのまま外から鍵をか

けられて日中を過ごす。それを見た親がショックを受けるのですが、それでも、感謝してそこに預けなければならなかった。ほかに選択肢がなかったからです。

私たちは新しい福祉施設を作る作業を始めました。2013 年 8 月には仮園舎での事業が始まりました。同年 11 月に NPO 法人を取得し、翌 2014 年 2 月に事業運営を正式に開始します。私は、その法人の理事となって、気仙沼まで通いました。

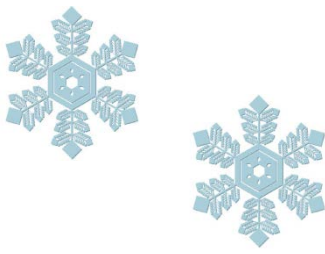
——仙台の教会で牧師をしながら、片道 3 時間以上かかる気仙沼まで、ずっと通われているんですね。そして、今、どうなりましたでしょうか。

感謝なことに、入所者数も順調に推移し、経営は安定してきました。私たちの施設の特徴は、生活訓練を事業の中で大きく行う点にあります。具体的には作業療法・運動療法等を行っています。また、この施設で新しく 10 人くらいの雇用を生み出しました。とりわけ、当事者の母親が 2 人、活き活きと働いています。それはとてもうれしいことです。

——これからの展望はどうでしょうか。

広い敷地を与えられましたから、そこに公園を整備して、地域に開放しつつそこで運動療法を本格化することを、長期的な目標としています。また、気仙沼の旧市内から本吉への距離が問題となっています。利用者の往復の移動に時間がかかり過ぎているのです。それで今、旧気仙沼市内に新しい施設を作ろうという計画が進んでいます。志を持った方が名乗りを上げてくださいました。新しい組織も結成されました。佐藤さんはその副理事長となり、私はその監事となります。今年 12 月には事業開始の予定です。引き続きお覚え頂き、ご支援を賜れば幸いです。

（了）



## 巻 末 言

東北ヘルプ事務局長 川上直哉

被災地には、7年半余の月日が流れました。たくさんの出会いがあり、そして、悲しい別れも、幾つもありました。今回、井形さんが追悼文に記して頂きました通り、金子牧師との死別は、私たちにとって寂しく辛いものとなりました。

金子千嘉世牧師は、震災の時まで、九州の宮崎県で牧師をしていました。教会の裏を改造して、駄菓子屋さんを開いていました。そうしていると、いろいろな子どもたちがそこにやって来て、そして時間をつぶしていく。その様子を見てみると、困っている様子、行き場のない様子も、見えてきたりする。彼女はそうした一人ひとりに声をかけ、ある時はご飯を食べさせ、あるいは、その子どもの親御さんと友達になる。そうしてその教会は、行き場のない人が安心していられる場所になる。複雑で、なかなか相談できない色々な困りごとを、一緒に考え、一緒に困り、一緒に生きていく、そんな場所に、教会がなる。彼女はそういう教会の牧師さんでした。

震災が起きた時、彼女はすぐ、東北に来てくれました。岩手県と福島県に一か所ずつ、センターと教会を拠点にして、ボランティアの受け入れや相談の受付などを始めます。物資を運び、あるいは被災された方たちと一緒にお茶を飲み、一緒に泣き、あるいは笑って、混乱の中にある被災地で大切な働きをなされました。

彼女が拠点にした福島県の教会は、郡山市にありました。除染をしてもなお、ガイガーカウンターが「退避」を警告する激しい音を鳴らし続ける場所でした。私も何度も、その教会に行きました。軍隊でも退避するレベルの放射線量の中で、多くの人が避難をしましたが、避難できない人もたくさんいた。その人たちと一緒に

生きる。彼女はそう決めて、宮崎の教会を辞して福島県郡山市の牧師となりました。

その後、金子先生は東北ヘルプの理事となってくださいました。食品放射能計測プロジェクト共同運営委員会と福島県キリスト教連絡会放射能問題学習会にも毎回出席くださいました。お母さんたちの自助組織「3a!郡山」や福島県川内村の避難者への支援組織との協働をご一緒することもできました。

しかし彼女は病に倒れました。でも、福島県の病院では、いろいろな事情があるのでしょうか、最終的な診断をしてもらえず、宮崎に戻って調べてみると、末期の癌でした。それは、通常の現れ方ではなかったそうです。

彼女は入院しました。手術もしました。でも、お医者さんは「もうどうにもならない」と言いました。それでも金子先生は祈り、諦めず、治療を続け、そして、牧師を続けました。テレビ電話を使って、福島県郡山市の教会の毎回の集会につなぎ、聖書の言葉を語り続けました。希望を持ち続けることの意味を語り、神様を信じるように、皆を励まし続けました。昨年（2017年）のニュースレター「イースター号」には、郡山に戻ってこられて新しい企画を進めようとする金子先生の様子が報告されています。しかし遂に、先月末、彼女はこの世を去ったのでした。

東北ヘルプは祈りに支えられています。私には、金子先生が神様のみもとで、今までにも増して熱く、祈ってくださっているように思われます。見えないところで、気づかないところで、多くの祈りが、そのようにして私たちを支えていてくださる。そのことを思い出しながら「9年目の被災地」へと向かっていきたいと思います。（了）



# 収 支 計 算 書

NPO法人 被災支援ネットワーク・東北ヘルプ

自 2018年 4月 1 日

至 2018年 10月31日

(単位：円)

|        |                   |           |
|--------|-------------------|-----------|
| 会費収入   | (正会員・協賛会員 合計21件)  | 55,000    |
| 献金収入   | (教会・団体・個人 累計149件) | 4,603,266 |
| その他収入  | (預金利息等)           | 4         |
| 収入計    |                   | 4,658,270 |
| 給料手当   | (職員給料手当・退職金を含む)   | 1,514,000 |
| 法定福利費  | (社会保険・労働保険)       | 141,002   |
| 新聞図書費  | (書籍代)             | 37,430    |
| 通信運搬費  | (電話・郵便・運賃)        | 234,300   |
| 賃借料    | (コピ-機・レンタカー)      | -         |
| 支払手数料  | (銀行手数料)           | 29,211    |
| 外注費    | (社労士等)            | 415,800   |
| 消耗品費   | (10万円未満の消耗品)      | 460       |
| 事務用品費  | (10万円未満の文具等)      | 121,636   |
| 広告宣伝費  | (ニューズレター等)        | 447,774   |
| 租税公課   | (償却資産税・印紙等)       | 600       |
| 旅費交通費  | (高速代・JR券代等)       | 474,824   |
| 燃料費    | (ガソリン代)           | 129,084   |
| 地代家賃   | (家賃・駐車料)          | -         |
| 会議費    | (会食代・会場代等)        | 139,205   |
| 雑費     | (その他経費)           | -         |
| 支援費    | (他団体への支援)         | 1,486,284 |
| 支出計    |                   | 5,171,610 |
| 当期損益金額 |                   | -513,340  |
| 前期繰越損益 |                   | 1,238,239 |
| 次期繰越損益 |                   | 724,899   |

2018年度(2018年4月～2019年3月)は、  
1200万円の予算を組んでいます。

2018年10月末時点での進捗率は、以下の通りです。

1. 日数=12か月分の7か月=58%の進捗時点で、
2. 収入=1200万円に対して4,658,270円=39%(前年同期比約120万円減少)
3. 支出=1200万円に対して5,171,610円=43%



## 献金感謝

(2018年4月1日～2018年11月14日)

お支えいただきました。本当に、ありがとうございました。(東北ヘルプ事務局)

### 献金者・協賛会員ご芳名(敬称略・順不同)

ICU 教会ハートベルリンガーズ 西尾朋代 JTJ 宣教神学校長崎学会 NPO 法人ホザナ・ハウス 森康彦 YMCA トウザンソウ  
愛のいずみキリスト教会 笹川純子 相場郁朗 青柳芳明 赤崎克俊 阿部望・典穂 飯沼一浩 石原潔  
イソワリチカコイゴソソコウシャ ベンゴシ オオシマ ユキコ 井出存祐 井上勇二郎 岩間節子 榎本聡子 大阪水上隣保館 法人事務局 延原  
太田伸二 大月新生教会 山内賀代子 大友孝子 大野則子 岡田真美子 学院長 伊藤美奈子 柏原繁宜 勝館良証  
金町教会 上坂寛子 河内常男 川島敬子 カンバーラント長老キリスト教会 東小金井教会 菊地弘生 岸和田聖書教会  
倉石昇 栗原敦 恋が窪キリスト教会 児島教会 小林和代 斉藤みや子 斎藤泰子 在日大韓基督教会全国教会女性連合会  
佐伯靖子 境キリスト教会 櫻井志穂子 佐藤久芳 塩田瑞代 静岡草深教会 アドナイ館施設長 上野貢一 渋谷真之 島塚啓子  
清水恵子 清水弘一 真柄周吾 新所沢教会 菅沼理也子 菅美枝子 須磨教会 仙台北教会 高井ヘラー由紀 竹本栄子  
田島慶子 谷博美 谷村和枝 玉川愛子 千葉 YMCA 土居理也子 徳島教会 中尾慎宏 長嶋清 中林撰 中村忠男  
中山信一・朝子 長山忠雄 名古屋キリスト教協議会 新津テイ子 西之表基督教会 池田公栄 西村恵子 ニューホープ横浜  
のぞみ教会 野辺地教会 橋本啓子 濱地正枝 原宿教会 子どもの礼拝 はりま平安教会 春名克容 日向町教会  
広畑キリスト教会 福井紀子 福田一彦 藤原俊樹 防府バプテスト教会 保科修也 細井孝江 松井弘子 松田芳昭 松本設子  
松本直展 松本芳哉 水永晃子 道本純行 宮古聖ヤコブ教会 ムギクミチコ 室町教会 本村大輔・いずみ 茂原昇天教会 高田眞  
桃谷ちよ 森みゆき 山口由紀子 山中伸郎 山室誠 吉田朋子 世の光キリスト教会 ヨロコビケンキウカイ  
名古屋キリスト教社会館 理事長 湧井規子 渡辺滋子 渡部眞澄 安住英子 安藤元昭 伊豆高原教会 稲瀬恭子 引間春一  
塩田隆良 岡田(真美子)真水 岡田純爾 沖本正隆 荻原邦子 仮屋キリストの教会 学校法人横浜英和学院 関山幸代 吉田昭男  
吉田正子 久が原教会 久里浜教会 京都丸太町教会 橋本富子 金町教会 金南植 佐久間弘子 佐川英美 細井孝江  
坂内義子 三井 肇 三浦忠雄 三橋稚津子 山崎耕司 酒井照子 渋谷真之 所沢聖書教会 小高美幸 小倉徳力教会  
松浦賢治 上坂寛子 上山教会 中村正俊 上野緑ヶ丘教会 真宗大谷派開光寺 佐藤智眼 神戸キリスト教書店 杉林則子  
世田谷中央教会 星野房子 清瀬グレースチャペル 西尾和加子 青柳芳明 石井出一 赤崎克俊 千葉あつ子 川上純平  
川上政孝 川島敬子 船田献一 倉石 昇 村山正治 太田伸二 大井美歩 大曲ルーテル同胞教会 大日方由美 大友孝子  
竹本栄子 猪瀬恭子 長崎インターナショナル教会 長山忠雄 鳥飼バプテスト教会 三田真理子 天白教会 牧師 渡辺徹朗  
田中暉彦 渡辺 亮 渡辺亮 渡辺滋子 渡邊ミドリ 渡邊信 土居理也子 島塚啓子 藤田直子 内田たけこ・公子  
尼崎教会 瀬戸偉作 日高キリスト教会 日本イエス・キリスト教団 日本キリスト教社会事業同盟 理事長 稲松義人  
日本基督教団東北教区放射能問題支援対策室 八潮キリスト教会 八尾福音教会 道本純行 福本知恵子 名和真理子 有山敏  
鈴木則雄 六甲シャロームの家 大西高雪 和戸教会 櫻井志穂子 川上直哉 田中武司 阿部頌栄 秋山善久 吉田隆 中澤竜生  
木田恵嗣 金子千嘉世 本村大輔 小西望 西鎌倉教会 匿名(多数)

(了)





## 支援金・献金の受付口座

### 【郵便振替】

02290-8-136273

特定非営利活動法人

被災支援ネットワーク・東北ヘルプ

### 【他金融機関からの振込口座】

ゆうちょ銀行 二二九店

当座預金 0136273

発行責任 NPO 法人 被災支援ネットワーク・東北ヘルプ

代 表 吉田隆（日本キリスト改革派甲子園教会牧師・神戸改革派神学校校長）

事務局長 川上直哉（日本基督教団石巻栄光教会主任担任教師・

食品放射能計測プロジェクト 共同運営委員会委員長）

理事 田中武司（保守バプテスト同盟西多賀聖書バプテスト教会員・財務担当）

理事 中澤竜生（基督協団仙台宣教センター国内宣教師・扶助基金実行委員会委員長）

理事 秋山善久（日本同盟基督教団仙台のぞみ教会牧師・NPO 法人 セミナーレ理事）

理事 阿部頌栄（日本ナザレン教団仙台富沢教会牧師・仙台食品放射能計測所長代行）

理事 木田恵嗣（ミッション東北郡山キリスト福音教会牧師・ふくしま HOPE 代表）

理事 金子千嘉世（日本バプテスト連盟郡山コスモス通りキリスト教会牧師）

監事 小西望（日本基督教団仙台北教会主任担任教師・日本基督教団東北教区総会議長）

監事 本村大輔（救世軍杉並小隊長）

※肩書等は、すべて 2018 年 5 月末日現在

Sendai Christian Alliance Disaster Relief Network

# Touhoku HELP



Per crucem ad lucem（十字架を通過して光へ）

〒980-0012 宮城県仙台市青葉区錦町 1-13-6 食品放射能計測所「いのり」 気付 ※住所が、変わりました。

TEL/FAX. 022-263-0520 URL : <http://tohokuhelp.com> MAIL : [sendai@tohokuhelp.com](mailto:sendai@tohokuhelp.com)